

岩倉城遺跡

位置・経過：岩倉城遺跡は、岩倉市下本町字城跡を中心とする一帯に所在し、五条川右岸の標高10m前後の自然堤防上に立地する。発掘調査は、県道萩原・多気線が岩倉城本丸跡の北部を東西に横切るために事前調査として実施したもので、城跡の下には弥生時代の遺構の存在が推定できたので、二面調査となった。調査面積は756㎡であり、発掘区を東西にA・B区に分けて実施した。

岩倉城史：織田敏広が築城したといわれるが確証はない。しかし文明8年（1476）守護所をめぐり、下津にいた守護織田敏広と織田敏定が争い、敏定が下津を焼いたので、敏広は岩倉城を築いて清洲城の敏定に対抗し、文明11年（1479）の和議後、敏広は岩倉に在城したらしい。その後代々敏広の子孫が城主になったが、信賢のとき永禄2年（1559）に織田信長に攻められて落城し、以後廃城となった。

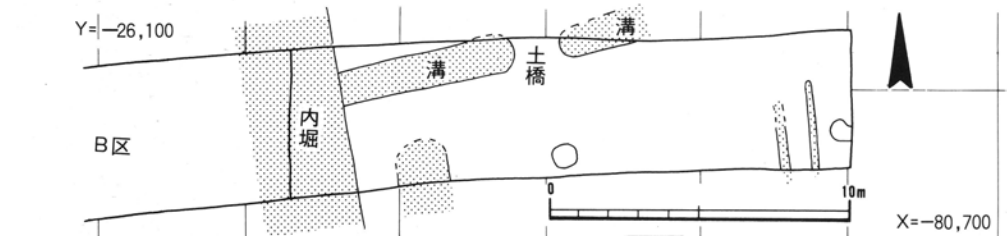
遺構：城の縄張りが明らかな絵図等は残存しないが、北東から五条川の水を二重堀に引き、東西60余間の本丸に望楼をそなえた平屋建て間口21間、奥行15間の建物がある。



第1図 岩倉城遺跡位置図



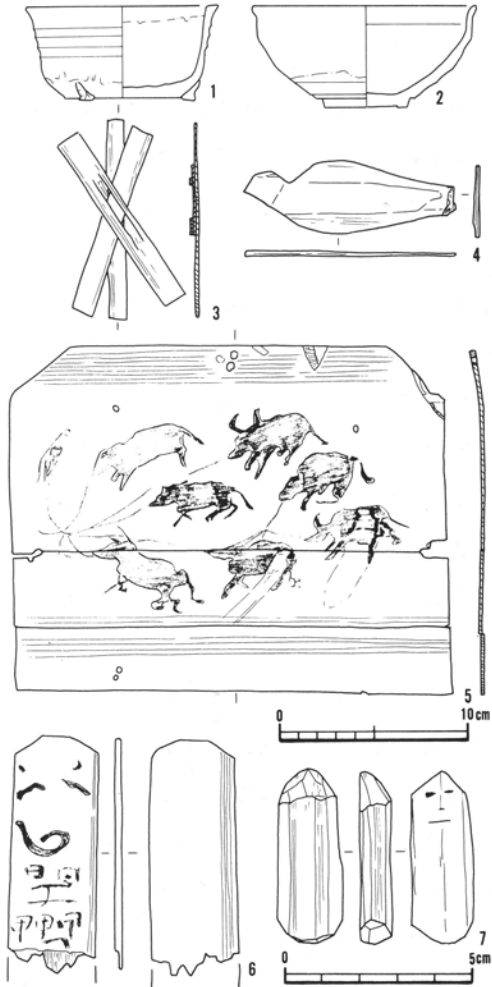
第2図 岩倉城二重堀復元図



第3図 A区遺構図

つたらしい(「前野文書」)。地籍図からは、北東部分を除いて外堀の位置が復元できる。A区では建物跡は検出していないが、西端で南北にのびる幅6m、深さ2mの内堀らしい溝を検出した。また東西にのびる幅3m、深さ1mの溝も検出したが、これは本丸内を区画する溝で、堀り残し部分は土橋と考えられる。

遺物：A区で出土した主な遺物には、土師質皿、瀬戸・美濃系陶器、常滑系陶器、中国陶磁、木製品、竹製品等があり、内堀・溝からの出土が多い。特に土師質皿は多く、一括投棄された様子が認められる。瀬戸・美濃系陶器としては天目茶碗(図4-2)・香炉(図4-1)・播鉢、常滑系陶器には甕、中国陶磁には青磁碗・鉢、染付、木製品には板・折敷・ひしゃく・曲物・しゃもじ・箸・漆碗・下駄のほか呪術的・祭祀的色彩をおびた遺物(図4-3~7)がある。竹製品としては、茶筌・籠等がある。築城時の整地層中から、弥生時代後期の土器、奈良時代の須恵器が多数出土した。



第4図 出土遺物(1~4:1/4、6・7:1/2)

(松原隆治)



内堀 遺物出土状況



発掘区全景